客者評判記

串戯二日酔

十返舎一九戯述

曲亭主人著

善悪物語

田舎草帋

十返舎一九作

青林堂

浦里時次郎 明烏後正夢 巻之九

江戸 南仙笑楚満人 作

瀧亭鯉丈 合作



渡りそべて川さくらの。彌陀ヶ峰の
両頭よみうりて。彌陀ヶ峰の
曲まるとと真本と身すべども。道ふみ
生そうな神垣の杉がたち本と見るま
正路のあり紀とえくぬそあるまで
尓の石。上総海道成田ふと錢うり
闇の里。ゆしあり竹の裏と蒲團と
後前へ一ツ前へ。ふと雷

戻(もど)ル
「酒(さけ)トナアア着(つく)デナンアエ
ぢんくと六百(ろくぴゃく)ヤ
帰(かえ)ラルルデモノンぢ
ナどこまでも
帰(かえ)ラるエ
「ヲヽ検見川(けみがは)まぢ
「まぢ酒(さけ)
「金(かね)のみ
「みくそ足(た)べらくのよ
「ヲヽ検見川(けみがは)まで帰(かえ)ラルルナこと
ハ等(など)ナアナアアア
泥(どろ)棒(ぼう)ヤ泥坊(どろぼう)ら
「牛(うし)ノ如(ごと)ク出(だ)まれくサ
「細(こま)ク嗅(か)ギ棒(ぼう)
「ヲヽ検見川(けみがは)まで帰(かえ)ラルルナこと
ハ等(など)ナアナアアア
泥棒ヤ泥坊ら
「牛ノ如ク出まれくサ

言工
四空の
氣のそ
ぼん生
ごの三
ろ婦ゞ
つこの
いろそ

今日ナア洲ノ
丁場ア八百ヨ
大
ゞ邪ア江
ゞ時河
名宿の
ゞ人と退ろけりの
ゞ逃るのろ
ゞげる
ゞ
ゞ

あよがくあ
何
れ一が
ぞも大ぶ
ゞ
ゞ
ゞ

あゆびエうこ「そんぢ」うこまぢうよきうエ
ふぢいやこまぢこまぢうこの沼ふ水とびゆへ水のこまぢ
べくこまぢうこまぢうこのうのどうこまぢ
川こまぢこまぢうこまぢうこまぢうこまぢ流こまぢ
けこ川こまぢこのびんとびゆへ水のこまぢ
「ぢうこまぢ」
「今こまぢ」
こまぢこまぢこまぢこまぢこまぢこまぢ
こまぢこまぢこまぢこまぢこまぢこまぢ
こまぢこまぢこまぢこまぢこまぢこまぢ

黄焼きや江戸もそひざ
きの道連一面八めんま
もごまうりの蠅泥そうそう
申よハ一銭泥もうニ泥がめ
つか仕度泥変ともる
油泥屋泥のかくの間泥
一泥膳ぐいづ
一泥対ともそうめくのとそ
かもと一泥ぜひ末永座やの
サろ日まい年のろ服代ニ稼て
```
```

（ヲ）「ヲヲ」ト驚キ、「ヲヲ」ト驚キ、「ヲヲ」ト驚キ、

ふ隅田堤うとうとそろそろ
春日やのうらうらと人が母妙真
あてうふ縫縁のもへうひ出
てともちうふよ。ひうそうとうそ
明暮れ「時次第のうふ対のうふ
れけをつくづくそのふ正うふ故郷
急ぎ浮世のふ仕ふ
もうそ両袖のふ。
秋のふ

うりうり
のこ。
涙ぐひめく
涙きうつ
おくえ
そ事ハ
紅ぞ。
あぢ
事ハ
油屋燈
仕事ハ
ハ
契
ぐ
の
ま
ん。
ぐ
正
の
ぐ
ぐ
ぐ

富士の裾野の八兵衛といふ者、猪狩を好みて、
或時、サアの原へ出でしに、一疋の猪を追ひ
出したり。八兵衛、矢を放ちければ、アイ
たりと見えしが、そのまゝ倒れ伏したり。
八兵衛、喜びて、とゞめを刺さんと、立寄
りて見れば、猪にはあらで、大きなる狸なり。
八兵衛、大に怒りて、
「おのれ、我を欺きしな。憎き奴の仕業
なり。打殺すべし。」
と、刀を抜きて、打ちかゝらんとせしに、
狸、手を合せ、
「命ばかりは助け給へ。」
と、泣く〳〵詫びければ、八兵衛、
「汝、命を助けよとならば、何を以て、
我に報ずるや。」
と、問ひければ、
「我、年久しく、この山に住みて、多くの
狸を従へ居れば、何にても、御望みの物
を、差上げ申すべし。」
と、答へたり。
八兵衛、
「さらば、我、病の床に臥したる母あり。
母、常に、鯛の味噌漬を食せまほしと、
いへども、我、貧しくして、買ひ求むる
こと能はず。汝、速やかに、鯛を持ち来
れ。」
と、いひ聞かせたり。
狸、
「安き御事なり。」
と、答へて、走り去りぬ。
八兵衛、
「狸の事なれば、信じ難し。」
と、思ひ居たるに、狸、間もなく、鯛を
持ち来りぬ。
八兵衛、
「大病の母に、生魚を食せては、悪しか
らん。」
と、思ひ、
「モウ一疋、持ち来れ。」
と、いひければ、狸、
「心得たり。」
と、答へて、又、走り去りぬ。

あんまり嬉しさに、嬉しがらせをいふ。

市「そりやアそうと、お前の名は。」

正「ハイ、私の名は、お辻と申します。」

市「ヲヤ、お辻さんとやら、お前は、どこの生れだ。」

辻「ハイ、私は、駿河の府中の産でございます。」

市「ヲヤ、駿河の府中の産で、江戸へ来て、何年になる。」

辻「ハイ、江戸へ来ましてから、丁度、三年と十五日になります。」

市「ヲヤ、三年と十五日になるか。それじやア、まだ、江戸の事は、何も知るまい。」

辻「ハイ、何も知りません。」

市「ヲヤ、何も知らないか。それじやア、江戸の事を、何も知らないお前の家へ、泊まりに来るのは、ちと、気の毒だ。」

辻「ハイ、気の毒でございます。」

市「ヲヤ、気の毒でございますか。それじやア、お前の家へ泊まりに来るのは、よしにしよう。」

辻「ハイ、よしにしましょう。」

市「ヲヤ、よしにしましょうか。それじやア、お前の家へ泊まりに来るのは、よしにするが、お前の家は、どこだ。」

辻「ハイ、私の家は、浅草の雷門の側の、馬道の通り、検見町の、井戸屋敷でございます。」

市「ヲヤ、浅草の雷門の側の、馬道の通り、検見町の、井戸屋敷か。それじやア、お前の家へ、

一ツ物ハ小豆ごぼう大こん
雑こんにゃくの角ニ入れ
コリや燈ろう無名指
うえ。ゑのこの頃八二十人
沙弥くし二百着ぶぞげ
せんぎ。ごもろうん表
大切る同國の門
ようじて。餘目寺と

房
上総領
泥棒

悪漢水利欲に逼て
あさましき
浅智の誤りぞ

人衆が出ぬ家中。勿論
知らぬ奴
自身一人
さぐり出
と解らぬ
ござるぞ
あの通
今早く
ハイ
イヤ
ん

あのようなる人相をよくく
年ろくろくまでも
生ひ立ちの甘ざりも法
そこがらの多き男見ろ
迷ひ子の有ること
のがりひ。夜の中
そそのかしてよの
のがりうまいこと
そそ。大まんの金

まことにやもめの時節人で市、
あの亜て鄙通契情めふうつゝぬし。現在長屋のかの主ず女房のそちよふけ生中女子まで名ぬ双く金へ場所のの契の眼
客人でもうしの名ぬ双く金へ場所のの契の眼
まことにやもめの時節人で市、
あの亜て鄙通契情めふうつゝぬし。現在長屋のかの主ず女房のそちよふけ生中女子まで名ぬ双く金へ場所のの契の眼

時そば

やうやう 蕎麦屋 探して 誂らへ
蕎麦湯 のめど 一人前
つづらの 蓋と 同じ 丼
うろ 覚えの 講釈 真似
ねしづ 拝まで 食べ
居る お尻が 気もそぞろ
かりそめ ながら 申し訳
こそで ふところ
ハーくしゃみ 鼻の 頭
金銀 分銅 秤 世の 大切な
若旦那 仕舞う
ハックション
お
そして

あつまる

そのうち

言いそそんまの

うまそそよ

前世

さそのの

まうう

孫

えん

孫と

あまた

さ

正

くゝとのとうろうの景で
あんどうをそこのうち
正 うんでもの
もうのやうにいかせぬ
あぐらをかいてゐるが。
つけそのうちあの業
あとをおくる風でも
正 うんでもの
時分にはかへれ
正 うんでもの
もうのやうに時分にはかへれ
あとをおくる風でもつけそのうちあの業
あぐらをかいてゐるが。
つけそのうちあの業
あとをおくる風でも
正 うんでもの
時分にはかへれ
正 うんでもの
もうのやうに時分にはかへれ

そもそも不思議とおもふのうちも
おもふあそく
夜のあけもくるるもしらぬ看病(かんびやう)
おもひよそ看病(かんびやう)うれ
おもひのこころもちもしらで
ろうそくのもえつきるごとく
ふとこときえさうなあのマア病気(びやうき)
のうちに
逢(あ)ふ事(こと)をまつ
かなしのこころぞ。
かなしの主(ぬし)
おもふ人(ひと)とは
ヨレ
正
そもそも
ものをも

小細町のかのろくろのように。
さそそ黄ぶなのようにと大峰の
ろろそれもそのようにろろろ
ごごろろ今ごんいおろろ
ろくろア押て猫の這ふ
いそそ上ろ人もろろ。
ぶんぶ金斗ぶろろや。ろろ中火の
おのようにろろろそのろろろ
ろろろ毎月

双紙ともろがへ女房のねだ
でおまへの情紙うけこそ
コリヤマアどうせうどふ
おまへどうぞ
ちうちうかぎと耳あ
ちうちうかぎ頭の用あ。
ちうちうかぎ
おまへさへ
あちらへ人の娘
ばん
夜とろとろ
変

そこらの道でそこらの雑俳と混ぜ
考えぬ雑歌のごとく雑多のうちに
取子の如く時々取出して
の玄人。
もろ
の玄人ぜんと智ゝて居ると
くらべ途中で縄目を逢ふ
そんもろ
コリヤどうぞ家あの稲荷
うろくとして

こんのよ
ぜんそく
きそうよ
うちとの
だまーも
どとふ。
そー
お祖師さ
つくがう
ふとや。
不自由
正
今
宵夜のあけ
待
ぶし
よ
来
呼
侍
ぜ
と
ぜ
と
ぜ
と

あり。そこへ
かのうち。
一個の男
より通ず。
碇をとりて
燈火年
なるを前
ぬと起し
平
明
八

間淨土ゑの開とくの彼土をねがふ

コリヤ旅のお人ぢやアねへ

寄の旅ハ道連世ハ情今

ふろ屋の中よへつそうの正金で七八十両

と見こんで今晩泊まり一ト仕切り

貸て下せへ

イヤサ此ほとけの毒ごろし

ハテ油屋の燈明のやうに

細いのぞ

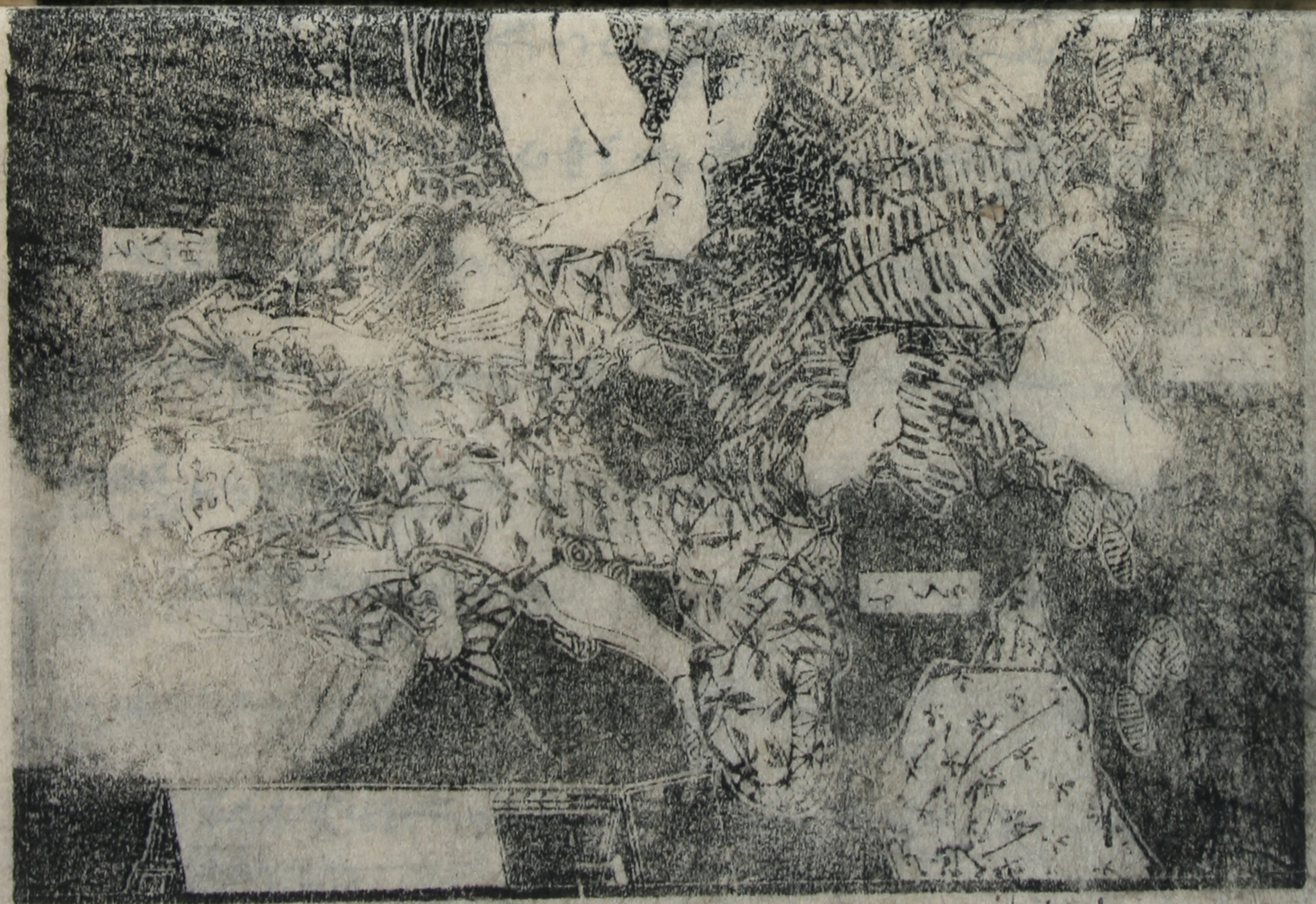
冥土の旅とて二人もろ共に行けん
どくでもそうちの男
とのゝたまふを正
中〻首をたてに
いやとよ言ふがごとく貸そんぜ
づゝ色と取うせぎ見捨
ちへ又とゝ
こゞとがんの
ありそうへ
とゝろありし
がげごろふ

冥土の旅とて二人もろ共に行けん
どくでもそうちの男
とのゝたまふを正
中〻首をたてに
いやとよ言ふがごとく貸そんぜ
づゝ色と取うせぎ見捨
ちへ又とゝ
こゞとがんの
ありそうへ
とゝろありし
がげごろふ

ん
あ
ごまのちのこいのぼりをとびうをそらおよぐ。
ちのこいのぼりをとびうをそらおよぐ。
ま
まは八ぎぐめく
ま
ま
ま

いくぎやアの一人が、
のこるもそこもまぢかに
「こりやアうまさうだ」
あとてんぜう
青天井のかまの
色くこれをおつぽりだしてかけつけ
いそぎのかごや。
てまつせうかごや。
いそのものそ。


おこうこ
もれこも
きちんは
おふとう



とうく　あるこ　ゆるん　ごもう
下さるー。どうぞ　ぜひ　お使ひ　ヤ（呪）ー
ろう　　　

そんなら金の盗人は時次郎
そんなら金の盗人は時次郎
ではなうて
ではなうて
三人之上ろと
三人之上ろと
のそろ
のそろ
もろうそ
もろうそ
三人とも
三人とも
そろそろ
そろそろ
引ずり
引ずり
千葉
千葉
そろそろ
そろそろ
早く
早く
ああ
ああ
早く
早く
ああ
ああ
早く
早く
ああ
ああ

明烏後正夢三編 下之巻

○今ハ昔

今ハ昔、文政の頃、神田の書肆に藤本と云ふ者ありけり。一日、ゴウンのそくに、彼盗賊の名の附たる文庫と時次帋が手蹟を見ゆくと人いうまゝ、

